

2010年マアジ

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

年	数 量									価 格						ムロ	アジ			
	漁獲	養殖	産地	輸 入	東京			消費支出 生(%)	在 庫	加工 塩干	産 地	輸 入	東京					消費支出 生(円)	漁 獲	産 地
					生鮮	冷凍	塩干						生鮮	冷凍	塩干					
21	165.0	1.6	111.8	43.8	19.4	0.4	11.2	1,572	39.3	53.3	160	143	488	368	419	1,472	27	17		
22	154.0	1.6	117.6	39.6	17.5	0.5	9.7	1,411	30.9	-	158	142	507	294	428	1,380	24	15		
%	93	100	105	90	91	127	87	90	78	-	99	99	104	80	102	94	86	87		

漁獲量と資源

22年の漁獲量は15.4万トンで、前年をやや下回り、平成11年以降の平均20-25万トン台を本年も引続きかなり下回る低水準であった。

本年は、山陰沿岸で減少したが主力の東シナ海で好調な水揚げであった結果、前年をやや上回った。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、1973～1976年の25～33万トンから1977～1980年の13～18万トンに減少した後、増加傾向を示し、1993～1998年には、51～56万トンの高い水準を維持した。1999年以降はそれよりやや低く、2001年は28万トンに減少したが、その後増加して、2004年は52万トンであった。2005年以降は減少に転じたが、2008年はやや回復して42万トンだった。再生産成功率は、1990～2000年まで、変動しながら減少傾向を示したが、2001年に急増した。その後は再び減少傾向を示し、2005～2007年はかなり低い値となったが、2008年には再び増加した。親魚量と加入量には正の相関があり、親魚量が少ない年には高い加入量が出現しない傾向がある、といわれている。

また太平洋系群の資源量は1990年代はじめまで増加し、高位水準になったが、1996年の16万トンを頂点として減少した。その後2000年と2001年は増加したものの、2004年以降は再び減少傾向となり、2009年は6.8万トンと推定された。親魚量は1984年以降増加し、1992年に最高の6.4万トンとなった後5万トン前後で推移したが、2001年以降は連続して減少し、2009年は2.3万トンと推定されている。なお資源を維持するための方策としては漁獲圧の削減が期待されている。

以上のように資源水準は中位であるがその動向は横ばい乃至減少傾向にある。

ムロアジ類

大中型まき網のマアジの資源密度指数は増減を繰り返しながらも長期的には減少傾向で推移しており、近年では低い水準にある。マアジを除くムロアジ類の資源密度指数は1990年代前半までは増減を繰り返しながら推移してきたが、1990年代後半に減少し、2000年代前半にかけて低い水準となった。その後、近年は増加傾向にある。マアジおよびムロアジ類（マアジ除く）の資源密度指数の相乗平均値は過去約30年間でみると低い水準にあり、最近5年間（2005～2009年）では増加傾向にある、といわれている。（近年 MAX：H2年 10.9万トン）

産地水揚量と価格（４２港）

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

海域別水揚量				月別漁獲量				月別価格推移			
海域	21年	22年	前年比	月	21年	22年	前年比	月	21年	22年	前年比
東シナ海	52.9	61.7	117	1	6.12	6.62	108	1	199	140	70
山陰	43.7	37.9	87	2	6.25	7.46	119	2	223	164	74
豊後水道		0.4	-	3	5.35	5.65	106	3	253	187	74
九州東岸	4.6	0.7	16	4	8.06	6.27	78	4	207	215	104
薩南	2.1	1.4	65	5	17.65	12.12	69	5	154	159	103
太平洋	2.6	11.3	433	6	13.93	10.88	78	6	150	195	130
その他日本海		2.0	-	7	11.77	14.62	124	7	149	159	107
	105.9	115.4	-	8	10.27	10.01	98	8	162	212	131
				9	12.41	10.08	81	9	120	179	149
				10	8.30	13.09	158	10	119	98	82
				11	6.94	15.01	216	11	115	106	92
				12	4.78	5.81	121	12	168	155	92
				計	111.83	117.63	105	計	160	158	99

22年のマアジの水揚量は、11.8万トンで前年(11.2万トン)をやや上回った。

九州西方海域では、春の盛漁期（４～６月）には昨年並みの漁であったが、夏場に漁況が極端に落ちず、しかも、秋口から冬場にかけても前年以上水揚げとなった結果年間水揚げは前年をやや上回った。

また、山陰沿岸では春の盛漁期（４～６月）の本年は昨年をやや下回る水揚げに終始し、秋漁で水揚げを伸ばしたが、結果的には昨年を下回る水揚げとなった。

太平洋側では薩南海域で前年をやや下回ったが、東海海域を含む太平洋側で漁獲が伸びた。

山陰沿岸では、依然、魚体の大きいマアジは少なく本年も周年豆アジ（０～１歳魚）主体で推移し、依然型の大きいアジは少なかった。

価格は、158円で下半期の集中水揚げもあり引続き前年（160円）を若干下回った。

輸入の動向

22年のアジの輸入は、4万トンで5～7万トンの近年の範囲を依然やや下回る水準であり、前年(4.4万トン)を下回った。

本年は、オランダ1.3万トン(前年:1.5万トン)、ノルウェー1万トン(前年:0.9万トン)、アイルランド0.08万トン(前年:0.3万トン)で主力のオランダは減少したもののノルウェーが伸ばしているのが特徴。また韓国は0.5万トンで前年(0.6万トン)をやや下回り、台湾は0.1万トン前年(0.1万トン)並みであったが、中国が0.1万トンと前年(0.2万トン)をやや下回った。

価格は、142円で価格の高騰も収まりほぼ前年(143円)並みであった。

在 庫 量

本年の在庫量は、3万トンと前年（3.9万トン）をかなり下回った。

これは、国内生産が若干の増加であったが輸入の減少があつて、このことが反映したものとみられる。

消費地入荷量と価格

22年の東京消費地の入荷量は、生1.8万トン（前年：1.9万トン）、冷0.5千トン（前年：0.4千トン）であった。塩干物は1万トンで前年（1.1万トン）を冷凍が前年をやや上回ったものの生鮮、塩干は前年をやや下回った。

本年の1世帯あたりの消費支出は本年も数量、金額とも前年をやや下回った。

価格は、生507円（前年：488円）、冷294円（前年：368円）、塩干428円（前年：419円）で、生鮮、冷凍・塩干は入荷の増減を反映し、生と塩はやや上昇し、冷は下落した。